名古屋市・中川運河再生を巡る動き

1. はじめに

名古屋にはまとまったウォーターフロントがなく、それゆえ潤いがない、魅力がないと言われてきた。歴史的に見れば、城下町・名古屋は、東海道の宿であり外港である熱田とは切り離され、大手筋と堀川だけで結ばれていたのであって、現在でも城下町を下敷きとした都心部から海までが遠く感じられる。しかも名古屋では、伊勢湾台風（1959 年）の悪夢もあって、ウォーターフロントがネガティヴにとらえられがちである。勿論、ウォーターフロントでの防災・減災を講じる必要があるが、その上に立ってウォーターフロントをポジティヴな都市要素として活用していくべきではないか。その数少ないウォーターフロンの一つ、堀川の再生については相当期間にわたって議論され、対策が講じられてきたが、中川運河の再生に至っては、近年になって運動が始められたばかりである。ここでは名古屋市・名古屋港管理組合による再生計画（案）策定に至る運動の広がりを紹介することにしたい。

２．中川運河の都市計画上の位置づけ

中川運河は、1924 年に 5 大運河（堀川・新堀川、大江川、山崎川、中川、荒子川）の１つとして都市計画決定され、1926 年に着工、1930 年に通水、1932 年には松重閘門を介して堀川と連絡された。中川運河は幅員 35 間～50 間、その両側に物揚場・倉庫敷地 20 間、道路 8 間、造成敷地 50 間を有するもので、松重と中川口の２閘門、また掘止と中川口の２船溜が設けられた他、親柱に意匠を凝らした橋脚が架けられた。ここで注目すべきは各種施設デザインではなく、むしろ中川運河が都市計画道路網や用途地域制あるいは名古屋港拡張工事と関係付けられて計画され、また「運河土地式」、即ち「運河を掘ってはその土で両岸の工場地を造成して行かうと云う、一石二鳥式の方法」により「中川運河沿線土地区画整理組合」等によって施行されたという点であろう。沿線の「集団鉄鋼街」「汎太平洋平和博覧会」等の開発については、茂登山清文他編『中川/運河/写真』（2012 年）収録、堀田典裕「〈水〉と〈土〉のデザインー中川運河と河岸地域を巡る低地の開発について」に譲るとして、ここでは運河という交通路を軸に「線状工業都市」が計画、実施されていた点を強調しておこう。

３．中川運河再生を巡る諸活動

中川運河は、最盛期の 1964 年度には年間 7 万 5 千隻の通航船舶数、400 万トン強の取扱貨物量を誇ったが、2010 年度では前者が 1.9%、後者が 1.2%にまで落ち込み、交通路としての役目を終えている。そこで 2009 年には名古屋都市センターにより「中川運河プラットフォーム」が設立され、そこから生まれた市民プロジェクト「中川キャナルアート」により、2010 年より小栗橋周辺の倉庫を活用したアートイベントが開催されてきている。ちなみに本年は 10 月 20－21 日、27－28 日にかけて、各種舞踏、音楽、映像の上演の他、水辺にあかりプロジェクト、コスモスプロジェクト、ポケットパーク・クリーンアップ、中川運河あるき隊 MAP 制作が行われた。更にこれを契機として「まちづくり基金」が充実され、来年度よりアート活動の支援が開始される。他方、本年 3 月に『中川/運河/写真』が出版され、同月には記念展覧会とシンポジウム「中川運河の景観と写真の眼差し」が、9 月には「中川運河の写真で遊ぶ　ワークショップ/展示」が開催された。

４．中川運河再生計画（案）

本年 7 月には、名古屋市・名古屋港管理組合が「中川運河再生計画（案）」を策定した。そこでは基本方針として、１．人と人、人と運河をつなぐ　２．水・緑・生き物に親しめる　３．モノづくりの未来を支える　４．まちの安全・安心を支える　を掲げた上で、全長を３つにゾーニングして、長良橋以北をにぎわいゾーン、小碓橋・玉川橋以南をレクリエーションゾーン、両者の中間をモノづくり産業ゾーンと位置付けている。本再生計画（案）の実現に向けて、ささじまライブ 24 地区に接続する北端部、名古屋港漕艇センターを中心とする南端部での市民活動の更なる高まりが期待されている。

（文責：名古屋大学大学院環境学研究科　片木篤）